



●筆子愛用のピアノを前に話す河尾さん―国立市の滝乃川学園で ●知的障害者教育に心血を注いだ石井筆子さん

# 「小さき者」に寄り添う



最初戸惑ったが、やがて「生涯を社会奉仕にささげたい」という思いを強める。同志会と共通の宗教的背景を持つ滝乃川学園に飛び込んだ。

河尾は学園で、歴史に埋もれていた一人の女性に出会う。亮一の妻で第二代学園長の石井筆子だ。筆子は、一八六一年、長崎県大村市に生まれ、いち早く欧州留学を経験。華族女学校の同僚だった津田梅子（津田塾大の創設者）らとともに近代女子教育を始めた。最初の夫との間に生まれた知的障害の長女をはじめ三人の娘を亡くした。夫も三十代半ばで病死。

「ピアノの中心に描かれた二人の子を抱く天使の姿こそ、筆子そのものです」。河尾はそっとピアノに手を置いた。（文中敬称略）

JR南武線を立川から川崎方向に向かすと、二つ目に「矢川」という小さな駅がある。駅の南にこもりした森が見える。一八九一年、日本で最初に設立された知的障害者のための社会福祉施設「滝乃川学園」。東大のキリスト教学生寮「同志会」を一九七三年に出た河尾豊司（五十）は、ここで三十四年目の春を迎えた。

入った河尾はただちに東大紛争の渦中に巻き込まれる。大学封鎖などの暴力と対決し民主的改革を目指す、持ち前のひたむきさから疲れ切り、心を病んで入院した。「安田講堂の封鎖解除の時も病院に進学した河尾は、同志会の門をたたき、それまでの悩みからキリスト教への関心を強めていた。祈りや賛美歌に

「小さき者」（弱者）に奉仕することが神に仕えることになる。二人は同じ目的のため役割を分担していたのではないだろうか」

長女を預けた石井亮一の理想に共鳴し再婚、学園の運営に心血を注いだ。筆子は障害児の教育こそ近代文明の核心であり、欠かせないものと自覚していた」という河尾。仲間とともに学園福祉文化室長として筆子の紹介に奔走した。その努力は実を結び、昨年、筆子を主人公に二本の映画が誕生した。「鹿鳴館の華」とつたわれた美しい筆子を常盤貴子が演じる劇映画「筆子・その愛―天使のピアノ」は、自身も知的障害者の母である山田火砂子監督の作品。学園を舞台に多くの知的障害者が映画に登場し、生き生きと演技する。宮崎信恵監督のドキュメンタリー「無名の人 石井筆子の生涯」は、吉永小百合が筆子の著作を朗読、平塚らいてうより十年早く男女平等を訴えた筆子を描く。学園のチャペルには筆子が愛用したとされる、日本に最も早く伝来したピアノがある。